
Cou Le Nae

手回しオルガン弾き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cou Le Nae

【ZPDF】

N6733Z

【作者名】

手回しオルガン弾き

【あらすじ】

Cou Le Naeとかそんなんです。

彼女はそこにいた。ほかにどこにいるというんだろう。僕には想像もつかない。

時間はもう過ぎていた。もう始まっているはずだった。立ち尽くす人々の前に、彼女はいるはずだつた。白い肌と、くすぐつたい長い髪の毛と、赤ん坊の指みたいな肩と、それから生きることに対する上目づかない嘲笑と、からかうような小さな鼻と、あざけりと、ゆるやかな時を持つて。雨が降りそうだつた。西からやってきた、都会を腐らせる古びたスモッグだつた。夜はアルコールの湿気を含み、明かりの助けを借りて狂騒的に波打つていた。ここは静かだ。まだ誰もいない。もう少ししたら、彼女を見終えた人々がここに溢れるだろう。それまではひんやりと静かだ。

クラブの中に入ると、停滞したざわめきを感じた。暗さはいつも通りだつた。ごつごつした機械じみた天井から降りてくる暗闇は不潔で生温かつたし、集まつた人々が互いに必要とする、わずかな肩と肩の隙間は敏感な苛立ちを含んでいた。足下にすでに吸い殻が散らばつている。暗闇は雪だつた。ゆっくりと、誰にも気づかれないように、その点で雪と違つたけれど、人々の肩や、襟の隙間や、スニーカーの編み目や、僕の爪の上へと、積もつて行つた。静かで確かに移り変わり。僕らは気づかないほどゆっくりと色あせて行く被写体みたいだつた。雪の中、遠ざかる船を見送りに来た村人みたいだつた。けれど、何かが違つた。いつもと少しだけ。少し壁紙がはがれかけている壁も、人々の手あかでペンキの欠けたポールも、足跡だけのスピークも同じだつたけど、何かが。それはここにい

る人々の意識だった。柔らかくもろい、感情の部分だった。彼らはそわそわとなくかを伺っていた。なにをだろ？ この人ごみの向こうには、彼らをつま先立ちさせ、ふらふらと肩越しに首を振らせる何かがあつた。ほとんどすべての人は黙っていたけれど、人が集まるに必ずそうなるように、どこかで数人のグループが囁いていた。彼らは自分たちのささやきがほかの黙っている人々の耳に入ることをどこかで期待していた。囁きは大きくなり、くすぐつたような笑い声とともに注意があり、それから再び小さくなつた。僕は人と人の隙間を無理に抜けて行く。ダウンを着たままの男の脇腹を抜けると、服の擦れる素早い音が聞こえた。それからグラスが合わさる音。人ごみは密接に関係し、それぞれがつながりあつていた。僕が起こした波紋は遠くに波及し、フロアの隅にいる暗闇に舌打ちを引き起こした。彼らは影だつた。僕は異邦人だつた。彼らは正面の光を背景に、ぼんやりと揺れる、意思を持たない黒い煙だつた。なにも始まらないこの景色と反対に、光はいくつもあつた。白い光も、赤い光も、ときどきは紫や緑の光も。だからと言つて僕は少しも満たされなかつた。ただ光は、そのときどきで、僕らの気持ちと無関係に大きく跳ねたり、集まつたり、散らばつたりした。光はそれだけで一つの情景のようだつた。遠い牧草地で行われる、静かな感情の纖細なやり取りのようだつた。僕は少しづつ人の間を抜けて行く。足と足の隙間を飛び越えて行く。

彼女はステージにいるみたいだつた。姿は見えない。近づくに連れて声が少しずつ大きく聽こえた。まだ幼さの残る詰まつたような甘い声だつた。

「……それじゃあ、広島から……？」

声は僕にまで届ききらなかつた。僕と彼女の間にある暗い床に落ちてしまつた。それらを拾い集めるみたいにして、僕はもつと前進しなくちゃならなかつた。

「……広島の……から……？」

「……じゃない……に……それで、東京に……」

「……は？」「行つたつきり……たしか……」

「……知つてゐる、そう、あいつはあれつきり……」

「……そう……あのときは……」

「……も無理は……わけじゃ……」

「……ええ……かも……」

彼女の声が聴けて僕は嬉しかった。子供の頃に好きだつた缶詰の特別なクッキーを思い出した。今は名前も思い出せない、海外の言葉で書かれたうす茶色い缶詰。彼女はもうすぐそばだつた。もうすぐ彼女の甘い鼻にかかる声を、ひとつ残らず聴くことが出来る。僕は速まる鼓動とは反対に、人を越える速度をゆるめ、フロアの先頭に辿り着こうとしていた。人々の垣根の向こうに、彼女がいて何かを喋つている。彼女の声だけが聴こえる。姿は見えないけど、声だけが。

「……知つてゐる、そう、あいつはあれつきり……」

二人は声を立てて笑つた。

「知つてる？」

これは彼女の声。

越えられない最後の一群があつて、僕は彼らを迂回しなくちゃならなかつた。僕は人々が作る、波のように歪んでいる背中の壁に沿つて、急いでフロアを横切つていく。人々の頭の影が途切れるところで、何度も彼女を振り返つた。その度に、彼女の溢れる髪や、白い指や、爪や、微笑みが見えた。僕は爪先立ちになり、ゾンビみたいに左右に揺れる。それから名残り惜しそうにその場を去り、また急いで歩き始める。振り返るたびに、彼女の姿は少しだけ遠のいた。

「嘘でしょ？」

僕が人ごみをかき分けて最後の一群を越えたとき、彼女はそう言った。それから笑つた。彼女は暖かなオレンジ色の膨張した光の中にいた。ステージのポールに腰掛け、見上げる一人の男と話しかけていた。いつもと同じ彼女だつた。氣怠そうで、長くたっぷりとした髪のあいだで、眠気と戯れているみたいな、いつも彼女だつた。

「ホントにそう、子供の頃は」

彼女の声。なんの障害もなく僕に届く、完璧な彼女の声だ。

「そう、あめ玉で泣き出しちまつよつな

「キヤンティ・ローズ！」

彼らは笑った。

「よく覚えてるな」嬉しそうに男が言つ。

「なにしてるのかしら」

「二年前に会ったときは、なにか販売を

「販売？」彼女は垂れた髪を後ろへやる。「怪しい

「怪しくない」

「なんの？」

「たしか、そのときは

コピー機つて言つてたかな

「今は？」

「今も販売。ただし怪しい」

彼女は笑う。「何を売つてるの？」

「怪しい水」

二人は笑つた。そして静かに微笑み合つた。彼女は手を差し出すと男と親しみのこもつた握手をした。

立ち上がつた彼女は光の中で、輪郭を淡く瞬かせ、光の中に消えていこうとしているみたいだつた。彼女は眠たそうに微笑んだまま、しばらく男を眺めていた。ここに集まつた僕らは身じろぎも出来なかつた。彼女は立ち上がつただけだつた。長くたっぷりとした髪を、ただ少し溢れるように揺らせただけだつた。髪の毛一本一本や、胸のあたりにある小さな骨のくぼみや、ドレスの腰の曲線に沿つて光をちらつかせただけだつた。それだけだつた。それだけで僕らは動けなくなつた。

彼女は腰の辺りで小さく手を振る。

それから、ようやくステージの中央に向かつて歩き始める。

僕らがここで待ち続けていることは、彼女の心配の種にはならない。多くの熱っぽい視線も急かしも、彼女には気にならない。僕らだつ

たらつい考えてしまう、嫌われるという恐れも、彼女は抱かない。ゆつたりとした、酔ったような歩き方をする。足音が鳴る。しどと濡れる、湿っぽい足音。彼女がかかとを床につき、つまさきを離すたびに僕は柔らかな彼女の性器について考えた。つるつるとした、陶器のように美しい滑らかな性器を。肉付きの良い女ではなかつた。胸や尻に男を魅了するような脂肪がついているわけでなかつた。ただ、向こうが透けるほど薄く白い耳と、そこから胸元まで続く乱れのない一本の美しい線があつた。皺の一つもない長い首筋と、ひんやりと冷たい広い胸元があつた。僕らはみな彼女を見ていた。彼女は誰もみていたなかつた。僕らを誰一人も。彼女にとつては僕らはみな同じで、僕らにとつて彼女は、たつた一人だけの存在だつた。その日、彼女は長いむかし話をした。それは夢の出来事のような不思議な話だつた。彼女は子供のころの生意気な彼女について話して話した。彼女は思い出すために話しているみたいだつた。僕らは意地悪だつた友人について、それから街にあるいくつもの坂について話した。彼女は必要だつたのかさえわからない。やがて話しが終わると、彼女は話しにオチをつけるみたいに、たつた一曲だけ歌つた。その日、彼女が歌つたのはその一曲だけだつた。

これが彼女だ。cou Le Na eだ。

僕は工場にいる。

ラッパ音、サイレンに似た音、それから誰かが作ったそれらしいメロディが流れている。始めのうち、この恐ろしい大音量に僕は心臓が放り出されたような気分がしたけど、今では鳴っていることをほとんど意識さえしなかった。あちこちで人の足音が聴こえる。

工場の廊下は薄暗かつた。それから寒かつた。ひんやりと冷気が、煙るみたいに染み渡つていた。電気はほとんどどこにもついていない。突き当たりの磨りガラスの向こうで、わずかに冬の日差しが見えているだけで。僕らは明かりを求めちゃいけなかつた。ここでは節約が正しくて、明かりは敵だつた。事務室にも、トイレにも、廊下にも明かりはない。夜でさえ普通よりも暗く調節された明かりが灯るだけだつた。急に音楽が止み、誰かの名前を呼ぶ声がスピーカーから聴こえた。僕の知らない人だ。ここは知らない人だらけだ。しばらくすると、また音楽が鳴り始めた。

「考えてきたか」

すでにトイレの中にいて、用を足しながら黄色い帯を眼で追いかけていたケイスケが言った。

「なにを」と僕。

「なにを、なにを　か

「僕は知らない。なにも知らない」

「そうやってわからないフリをすればいいさ

「フリージャない。わからないんだ、事実として」

「事実として、か」

彼は僕の言葉を信じずに、眉を上げる。

「事実をねつ造したいってわけだ」

「お前が捕まつたときにも、俺は警察に同じことを答えるよ。なにも知りませんよ僕は、本當です、なにも知らないんですよ」

「事実として、ね」

ふざけたような言い方で彼は言つ。

「じゃあ俺の計画には乗らないって言うんだな。大金を手に入れた後で後悔するなよ」

それから彼は、作り上げた犯罪の計画について話し始める。よどみなく彼は語る。言葉につまつたり、なにかが思い出せなくて考え込んだりしない。すっかり細部まで作り込まれた計画を、始めから終わりまで話してしまう。彼はいつも犯罪の計画を立てていた。僕はいつも彼の話を聞いた。彼は主婦が宝くじが当たった後を空想するみたいに、自分の犯罪計画について語り、語るだけで満足感を得た。計画は決して実行しない。ラインの内側で、向こう側を空想するお遊びだ。僕はトイレの壁を見ていた。彼もまたやはり見ていた。これは二人で共有する儀式的なお遊戯だ。彼は計画を話し、僕らは排尿する。煙を立てる。

「それでいいのか」計画を話し終わると、彼が言った。

「それでつていうのは？」

「そのままでも良いのかつていう意味だ」

「そのままでもつていうのは？」

「人生がこのまま惰性で進んで行くのを、ただ見守るのかつていう意味だ」

「ほかにどうしようもないじゃないか」

「ジャンプするんだよ、遠いどこか、別のところへ」

すっかり尿を出し終えた彼は、僕には見えない位置で性器をぶんぶん振り回すと、ぴちゃぴちゃ音を立てた。ジッパーをあげる音が

聞こえ、彼の臓器からわき上がるうめき声がする。銀色の丸いボタンを彼が押すと、遠く海の向こうから水がやってきて、彼の黄色い形跡を流して行く。僕らは身震いする。トイレの水が流れるこの音を聞くと、僕らは足下に地獄が広がっていることを考えなくちゃならなくなつた。地獄にもこんな滑らかな陶器があつて、みんなが用を足しているんだろうか。

「ジャンプしなかつたら——」

彼は言つた。その日の彼はいつもと違つた。ただの空想を話しているのとは違う、なにか、決断した跡のようなものが見えた。唇が震えていたのは寒さのせいだけではなかつたのかも知れない。

「ジャンプしなかつたら——永久にそのままだ」

彼はいろんなことに不満があるみたいだつた。今の生活に対して、それからここに工場での勤務について。彼が信じる自分の位置はどこか素晴らしい上流階級だつた。現実はここだつた。勤務中にときどきズルをしてトイレに行くのさえ喜びに感じる、狭苦しい規律の中だつた。彼がどうして、自分をそんなに過大評価しているのかはわからなかつた。いつも隣にいる僕がその感覚を考えるには、彼はどうやら強い確信があるみたいだつた。事実や客観的な条件なんかじゃない。ただ確信がある。彼が信じていたのはそれだけだつた。身体の中に指を入れて、手探りで真実に触れたみたいに、彼は自分の抱くその確信を強く信じていた。確かに俺はここにいる、何か高い目標があるわけでもない、なにかに恵まれているわけでもない、これまでの人生で誰かを遠く引き離すような素晴らしい結果を残したことがあるわけでもない。けれど俺は確信している。俺はこんなところにいるべき人間じゃない。　彼はそう思つてゐるらしかつた。

彼は順応力とでもいうべき、僕の楽觀性についてもいらだつていた。僕がここで生活にすっかり慣れて、とっくに自分を変革させることを諦めていたからだつた。彼が言つには、僕もこんなところにいるべき人間じゃないらしかつた。こんなところにいるべきじや

ない人間が、じたばたもがきもせずに、奴隸のような今的生活に甘んじていることが彼には許せないらしかった。彼の中には不思議な階級意識があつた。それを決定づける条件は彼にしかわからない。例えば、部署のまとめ役に僕が怒られたりなんかすると、彼にはそれがひどく気に食わないらしかった。なんだつてあんな毛の薄いランクの低いやつに、彼はこんなふうに、人を“低い”か“高い”で語るのだった。　いいようにされて平氣でいられるんだ。彼は僕に向かつてそう言つた。「アイツが同級生だつたら、きっと俺たちには頭が上がらなかつたはずだ」これが彼の口癖だつた。僕には彼の持つ確信や、人々を社会とは別の仕組みで再編成する能力が備わつていなかつたから、ただその言葉の余波を感じるだけだつた。そういう感じ方もあるのかも知れないな、僕はそう思うだけだつた。そういう彼の思考とは無関係に、彼の身体はどうしようもなく工場に順応していった。工場の自虐的な節制と、一秒まで定められたスケジュールと、ランダムに演奏する工場のプレス音に。

「おい　頼む、そんな風に水をたくさん出さないでくれ！」

手を洗う僕に向かつて彼は言つた。すでに手を洗い終えて、わずかに開いた窓から外の空氣を嗅いでいる。彼は自分でも気づかないうちに、必要以上という贅沢が許せなくなつていた。あちこちに張られた工場の張り紙のせいだつた。

「出してないよ」

「出し過ぎなくらいだ！」

「手を洗えないよ」僕は笑う。

「少しでいいんだよ、少しで！頼むから　少しに！」彼は言った。「水が大量に出ているのを見ると、ハラハラするんだ！」

トイレからの帰り道、僕らは自分たちの部署に回り道をして帰つて行く。一番近い道を選んだりしない。足がすっかり覚えてしまつたから、僕らはどちらも無言で、なんのサインもなく並んで道を選択する。小さく泡立つた緑色のボードを過ぎ、正門に射し込む陽の光を磨りガラス越しに見つめ、来客用の高い渡り廊下から、すでに

部署に戻り働き始めている灰色の彼らを見渡した。彼らは似たように不機嫌で、眠たそうに疲れていた。ひげを毎日剃るのは諦めた。「これが僕らだ。巨大な画面みたいなガラスの前で、僕らはいつも立ち尽くした。

「本当に乗らないんだな……俺の計画に?」

彼は言った。

「乗らない……」僕は一瞬、躊躇した。彼の言葉があまりに真剣だつたからだ。「今よりも自分を下げたくないんだ」

「浩一の　浩一の話しさ聞いた?」

「いや

「昇進したよ

「まさか!」

「本當だよ、信じられないけど本當だ」

ケイスケはずいぶんそのことについて考えてきたみたいだつた。僕に話すまえに、さんざん悔しい想いをしてきたみたいだつた。僕はテレビを見ながら、映像が頭に入らないケイスケを想像した。狭い部屋と、いつも誰か来客が来そうな雰囲気にびくびくしているケイスケを。

「たつた一年でだ」彼は言った。「俺はもう三年だ。なにか特別悪いことをしているわけじゃない。あいつが特別優れているわけじゃない。それどころかわざとらしい愛想がうまいだけです。クソツ、俺たちは未だにセミ・スタンダードだつていうのに

「待つてくれ!」僕は慌てて言つ。

「なんだよ?」

彼は顔をしかめて聞いた。

「なあ……」僕は一瞬、言おつか躊躇した。

彼はわからずに僕の言葉を待つていて。

迷つたけれど、僕は言つことにする。

「なあ……僕はセミ・スタンダードじゃない。スタンダードだ

「おい

「彼は笑いかけた。

「待つてくれ！」僕は急いで言つた。「くだらないこと、くだらないよ、確かに。けど」

「スタンダードもセミ・スタンダードも同じじゃないか。給料も、やっている仕事も、扱いも。こんなもの、会社が俺たちを少しでもおだてて、奴隸意識をこまかそつとしているだけの建前じゃないか」

彼は笑いながら言つた。

「知ってるぞ、そんなことはもちろん」

「勘弁してくれよ……」

彼はおかしそうにそう言つた。

「そうだとしても、僕は少し苛立つて言つた。「そうだとでも、せめてスタンダードになつてから言つてくれ」

彼は笑うのをやめて、しばらく僕を眺めた。僕も彼を見ている。僕は苛立つていた。けれど、彼は怒つてゐるようには見えなかつた。彼は悲しそうに見えた。もしかしたら、あれは憐れみだつたのかも知れない。まるで遠い夜に浮かぶ火事を見つめているような、そんな顔だつた。僕を哀れんでいとは思いたくなかった。せめて苛立つて欲しかつた。彼の瞳は、左右に揺れていた。

「確かにくだらないけど」僕は言つた。「ここにじや数少ない楽しみの一つなんだ。お前の言つように、僕らは知つてゐる。この階級が、工場が用意した子供騙しの上サだつてことも、実質上なんの意味もないことも。けど、実際に、僕らはそれを楽しみにしているんだ。プライドを慰めてくれて、慘めさを忘れてくれる数少ない

「お前がもし本当に、そんな風に自分の境遇がみじめだと思つて
いるなら」

彼は僕の言葉を遮つてさづり言つた。それから浩二に対する長い悪口を。彼は僕らを出し抜いて昇進していくた浩二が気に食わないらしかつた。たしかに、浩二には僕らをいらつかせるなにかがあつた。それは突き詰めて言つながら、わざとらしさだったのだと思う。浩二はなにするにもわざとらしかつた。彼が上司におべつかを使うの

も、一生懸命働くのも、疲れた表情を浮かべるのも、全部がわざとらしく見えた。けれど、そう思っているのは僕とケイスケだけしかった。あらゆるこここの従業員は、彼のこうしたわざとらしい行為を、額面通りに受け取るのだった。彼は眞面目で正しい人間だよ、人がそう言つと僕らは黙るしかなかつた。

「 ジャンプするんだよ、遠くに、今いるここではないどこか遠くに」
彼はそう言つたんだつた。僕に決断を迫るよつて、わずかに怯えた調子で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733z/>

Cou Le Nae

2011年12月26日21時50分発行